

知的障害者の自己決定における選択行為形成に向けた学習支援

—選択行為の振り返りに焦点をあてて—

○深井 敏行¹⁾ 加藤 宏昭²⁾ 小笠原 拓³⁾ 今枝 史雄⁴⁾ 菅野 敦⁵⁾

¹⁾東京都立志村学園 ²⁾東京都立武蔵台学園 ³⁾株式会社ドコモ・プラスハーティ ⁴⁾東京学芸大学大学院 ⁵⁾東京学芸大学

KEY WORDS: 知的障害 自己決定 選択行為

I. はじめに

成人期知的障害者の近年のキーワードとして自己決定が挙げられている。Wehmeyer, M, et al (1996)は自己決定には問題解決能力が関係するとしている。そこで今枝ら(2017)はこれまで提言されてきた自己決定及び問題解決プロセスと知的障害者の学習特性を踏まえ、「知的障害者の自己決定の選択プロセス」を提案した。自己決定に含まれる選択行為には選択肢(対象物)の理解(以下、問題理解)が必要であり、問題解決能力が関わること、また、「観点の重み付け(優先順位の付け方)などの「個人の嗜好」も関わることを示した。併せて、Miller, B, et al (2015)は自己決定には問題解決能力が関わり、それらを形成するためには問題解決プロセスを自己モニタリングする能力が必要であるとしている。よって、適切な自己決定には選択後にこれまでのプロセスの振り返りが必要であると言える。

以上を踏まえ、成人期知的障害者の生涯学習支援の取り組みであるオープンカレッジ東京では、自己決定における選択行為形成に向け「日常生活の“考えるわざ”」と称する講座(以下、日常生活講座)を開催した。日常生活講座では、自己決定場面の中でも契約場면을想定し、「1ヶ月の支出限度額(12,000円)の中で、その他の支出とのバランスを踏まえ、新しく携帯電話の契約を行う」という課題を設定した。

本研究では、「日常生活講座」の講座内容を報告するとともに、自己決定の選択プロセスに含まれる「問題理解」「選択行為の振り返り」の遂行状況について明らかにすることを目的とする。

II. 方法

1. 対象者:成人期知的障害者 34名である。年齢は平均 35.4歳(±9.6)であった。**2. 講座展開:**講座展開は大きく以下の4つであった。**1) 講義:**携帯電話の機種・機能や契約の説明を行った。**2) ワーク1:**①3種類の携帯電話から自分に合うと思う機種を直感的に選んだ。②携帯電話の料金と「その他の支出」のパターンを3種の中から選んだ。「その他の支出」は「買い物」「外食」「遊び」とした。③1ヶ月の使用限度額と選んだ支出との差を確認した。**3) ワーク2:**①「問題理解」:携帯電話の料金と「その他の支出」との関係をマトリックス表に整理して、比較した②比較した結果から、改めて自分に合った携帯電話の機種を選んだ。③「選択行為の振り返り」:携帯電話の機種を選んだ理由を自由に記入した後、ワークシートの穴埋め欄にも記入を行った。**4) ワーク3:**支出限度額は変更せず、携帯電話の機種代を変更して、再度ワーク2の活動を行い、新たに携帯電話の選択ならびに選択した理由を問うた。**3. 分析方法:****1) 問題理解:**ワーク2及びワーク3で実施した選択肢(携帯電話の機種)及びその他の支出のマトリックス表への整理についてその達成率を算出する。**2) 選択行為の振り返り:**ワーク2及びワーク3で実施した選択した携帯電話の選択理由の説明についてその達成率を算出する。達成水準は①自ら遂行できた「達成」、②支援者が活動のモデルを示した「モデル提示」、③一対一の支援が必要だった「一対一支援」、④遂行に困難を示す「遂行不可」の4水準とした。振り返りは、説明内に比較の観点もしくは要素を含むことを達成条件とした。

III. 結果

1. 問題理解

ワーク2及びワーク3におけるマトリックス表への整理活動の達成率を算出した結果を図1に示す。

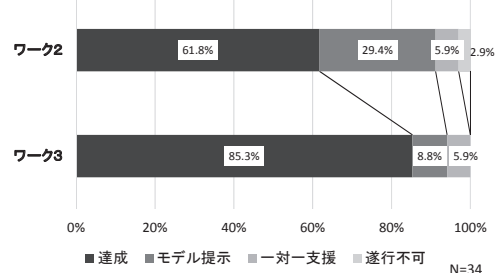


図1 ワーク2及びワーク3 問題理解プロセス 達成率

図より、ワーク3の方が達成者の割合が増加しており、遂行に困難を示す者はいなくなった。

2. 選択行為の振り返り

記入不備を除いたワーク2及びワーク3における契約する携帯電話の選択理由の説明活動の達成率を算出した結果を図2に示す。

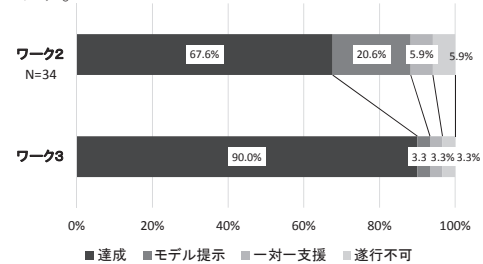


図2 ワーク2及びワーク3 選択行為の振り返り 達成率

図より、ワーク3の「達成」者は9割を超えていた。しかし、遂行に困難な者も見られた。

IV. 考察

「問題理解」「選択行為の振り返り」とともに、ワーク3はワーク2と比較して、「達成」が約20%以上増加しており、「遂行不可」も減少していた。条件の変化に対応して問題を理解し、自らの選択に適切な理由付けができていたことが分かる。また、自らの選択に関する説明もできるようになったことから、課題場面に対して論理的な理解が進んだことがうかがえる。これらのことから、本講座で用いたツールは日常生活の課題場面における意思決定に対しても一定の有効性があることが推測される。

V. 今後の課題

受講生数名は、ツールを使用した上でさらに支援者の介入が必要であり、ツールの精度向上が求められると言える。

また、実際の日常生活における課題場面では、まず課題を自ら発見するところから始まる。課題発見のプロセスは比較の観点づくりにも繋がり、論理的な意思決定をする上で重要であると考えられる。今後、課題発見のプロセスについても学習する機会を設定していく必要がある。

(FUKAI Toshiyuki, KATO Hiroaki OGASAWARA Taku, IMAEDA Fumio, KANNO Atsushi)